

## 【日本昔ばなし】舌切りすずめ

動画リンク: <https://youtu.be/Eu00dFgqC0I>

今回は日本の昔ばなし、「舌切りすずめ」を学びながら、日本語を勉強しましょう。

この動画は、1部、2部、3部に分かれ、3段階のスピードで聴くことができます。1部、2部、3部の順にスピードは速くなり、ふりがながあるのは1部のみです。学習にお役立てください。

### ■はじめに。

お話を始める前に、昔ばなし・童話・おとぎ話の違いについて少し説明します。

### ■昔ばなし

「昔ばなし」には、昔から語り継がれてきた話という意味があります。語り継がれてきた話なので、作者が誰かはわかりません。

### ■童話

子供が読むことを前提に作られた物語です。作られた物語なので、当然作者は存在します。

### ■おとぎ話

子供に語って聞かせるための「昔ばなし」や童話のことです。おとぎ話の中には語り継がれてきた昔ばなしも、そして創作である童話も含まれます。

「舌切りすずめ」はとても有名な日本の昔ばなしです。

それでは「舌切りすずめ」のお話を始めます。

むかし、むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがいました。

子供がいなかったので、おじいさんはすずめの子を一羽、大事にしてかごに入れて飼っていました。

ある日、おじいさんはいつものように山へ柴刈りに行き、おばあさんは井戸のそばで洗濯をしていました。

その洗濯に使うのりをおばあさんが台所に忘れてしまった間に、すずめの子がかごから出てきて、のりを全部なめてしまいました。

おばあさんがのりを取りに帰ってくると、お皿の中にはきれいさっぱりのがありませんでした。

すずめがのりをなめてしまったことがわかると、おばあさんは大変怒って、小さなすずめをつかまえ、無理に口を開けさせました。

「この舌がそんな悪さをしたのか」と言って、はさみで舌をちょん切ってしまいました。

そして、「さあ、どこへでも出ていけ」と言って放しました。

すずめは悲しそうな声で「いたい、いたい」と鳴きながら飛んでいきました。

夕方になって、おじいさんは柴を背負って山から帰ってきました。

「ああくたびれた。すずめもおなかですいただろう。さあさあ、えさをやりましょう」

と言いながらかごの前へ行ってみると、中にはすずめがいませんでした。

おじいさんは驚いて、「おばあさん、おばあさん、すずめはどこへ行ったのだろう」と言いますと、

おばあさんは、「すずめですか。あれはわたしの大事なのりをなめたから、舌を切って追い出してしまいましたよ」と平気な顔をして言いました。

「まあ、かわいそうに。ひどいことをするなあ」とおじいさんは言って、がっかりした顔をしていました。

おじいさんは、すずめが舌を切られてどこへ行ったか心配でたまらなくなり、次の日は夜が明けるとすぐに出かけて行きました。

おじいさんは道々、杖をついて、「舌切りすずめ、お宿はどこだ、チュウ、チュウ、チュウ」と呼びながら、あてもなく尋ねて歩きました。

野を越え、山を越え、また野を越え、山を越えて、大きなやぶのあるところへ出ました。

するとやぶの中から、「舌切りすずめ、お宿はここよ。チュウ、チュウ、チュウ」という声が聞こえました。

おじいさんは喜んで、声のする方へ歩いていきました。

やぶの陰にかわいらしい赤いおうちが見えて、舌を切られたすずめが門を開けて、お迎えに出ていました。

「まあ、おじいさん、よくいらっしやいました」

「おお、おお、無事でいたかい。あんまりお前が恋しいので、尋ねて来ましたよ」

「まあ、それはそれは、ありがとうございました。さあ、どうぞこちらへ」

こう言ってすずめはおじいさんの手を取って、うちの中へ案内しました。

すずめはおじいさんの前に手をついて、「おじいさん、黙って大事なのりをなめて、申し訳ございませんでした。」

「それをお怒りもなさらずに、ようこそ尋ねてくださいました」と言いました。

おじいさんは、「何、わたしがいなかったばかりに、とんだかわいそうなことをしました。」

「でもこうしてまた会えて、本当にうれしいよ」と言いました。

すずめは兄弟や友だちのすずめを全部集めて、おじいさんの好きなものをたくさんごちそうしました。

そしておもしろい歌に合わせて、みんなですずめ踊りを踊って見せました。

おじいさんはたいそう喜んで、うちへ帰るのも忘れていました。

そのうちにだんだん暗くなってきました。

おじいさんは、「今日はおかげで一日楽しかった。日の暮れないうちに、どれ、おいとましましょう」と言って立ち上がりました。

すずめは、「まあ、こんなむさくるしいところですけど、今夜はここへ泊まっていらっしゃいませんか」と言って、みんなで引き止めました。

「せっかくだが、おばあさんも待っているだろうから、今日は帰ることにしましょう。またたびたび来ますよ」

「それは残念でございます。ではおみやげを差し上げますから、しばらくお待ちくださいませ」

そう言って、すずめは奥からつづらを二つ持ってきました。

そして、「おじいさん、重いつづらと軽いつづらです。どちらでもよろしい方をお持ちください」と言いました。

「ごちそうになった上、おみやげまでもらってはすまないが、せっかくだからもらって帰りましょう。」

「でもわたしは年をとっているし、道も遠いから、軽い方をもらっていくことにしますよ」

こう言っておじいさんは、軽いつづらを背負わせてもらいました。

「じゃあ、さようなら。また来ますよ」

「お待ち申しております。どうか気をつけてお帰りくださいませ」

すずめは門口までおじいさんを送って出ました。

日が暮れてもおじいさんがなかなか戻らないので、おばあさんは、「どこへ出かけたのだろう」とぶつぶつ言っていました。

そこへおみやげのつづらを背負っておじいさんが帰ってきました。

「おじいさん、今までどこで何をしていたんですか」

「まあ、そんなに怒らないでください。今日はすずめのお宿へ尋ねて行って、たくさんごちそうになったのです。」

「すずめ踊りを見せてもらったりした上に、この通り立派なおみやげをもらってきたのですよ」

こう言ってつづらを下ろすと、おばあさんは急ににこにこ笑いました。

「まあ、それはよかったですね。いったい何が入っているのでしょうか」と言って、さっそくつづらのふたをあけました。

すると、中から目のさめるような金銀さんごや、宝珠の玉が出てきました。

それを見ておじいさんは、とくいらしい顔をして言いました。

「なにね、すずめは重いつづらと軽いつづらと二つ出して、どちらがいいかというから、

わたしは年をとっているし、道も遠いから、軽いつづらをもたらしてきたのですが、こんなにいいものが入っていようとは思いませんでした」

するとおばあさんは急にまたふくれっ面をしました。

「ばかなおじいさん。なぜ重い方をもたらってこなかったのです。その方がきっとたくさん、いいものが入っていたでしょうに」

「まあ、そう欲張るものではありませんよ。これだけいいものが入っていれば、たくさんではないか」

「どうしてたくさんなものですか。よしよし、これから行って、わたしが重いつづらの方ももらってきます」

そう言って、おじいさんが止めるのも聞かず、次の朝になるまで待てずに、すぐにうちを飛び出しました。

もう外はまっ暗になっていましたが、おばあさんは欲張った一心でむちゃくちゃに杖をつきながら歩きました。

「舌切りすずめ、お宿はどこだ、チュウ、チュウ、チュウ」と言いながら尋ねて行きました。

野を越え、山を越えて、また野を越え、山を越えて、大きな竹やぶのあるところへ来ると、やぶの中から、

やぶの中から、「舌切りすずめ、お宿はここよ。チュウ、チュウ、チュウ」という声がしました。

おばあさんは「しめた」と思って、声のする方へ歩いて行くと、舌を切られたすずめがこんども門を開けて出てきました。

そしてやさしく、「まあ、おばあさんでしたか。よくいらっしやいました」と言って、うちの中へ案内しました。

そして、「さあ、どうぞお上がりくださいませ」とおばあさんの手を取っておざしきへ上げようとした。

おばあさんは何だかせわしなくきょろきょろ見まわしてばかりいて、おちついて座ろうともしませんでした。

「いいえ、お前さんの無事な顔を見ればそれで用はすんだのだから、もうかまわないでください。」

「それよりか早くおみやげをもらって、おいとましましょう」

いきなりおみやげのさいそくをされたので、すずめはまあ欲の深いおばあさんだとあきれてしまいました。

おばあさんは平気な顔で、「さあ、早くして下さいよ」と言いました。

「はい、はい、それではしばらくお待ちくださいませ。今おみやげを持ってまいりますから」と言って、奥からつづらを二つ出してきました。

「さあ、それでは重い方と軽い方と二つありますから、どちらでもよろしい方をお持ちください」

「それはもちろん、重い方をもらっていきますよ」

と言うなりおばあさんは、重いつづらを背中にしよい上げてあいさつもそこそこに出ていきました。

おばあさんは重いつづらを首尾よくもらったものの、それでなくっても重いつづらが、背負って歩いて行くうちにどんどん重くなりました。

さすがに強情なおばあさんも、もう肩が抜けて腰の骨が折れそうになりました。

それでも、「重いだけに宝がたくさん入っているのだから、本当に楽しみだ。」

「いったいどんなものが入っているのだろう。ここらでちょいと一休みして、ためしに少しあけてみよう」

こう独り言を言いながら、道ばたの石の上に「どっこいしょ」と腰をかけて、つづらを下ろして、急いでふたをあけてみました。

するとどうでしょう、中には目のくらむような金銀やさんごと思いのほか、

三つ目小僧や、一つ目小僧、がま入道など、いろいろなお化けがよろよろ飛び出してきました。

「この欲ばりばばあめ」と言いながら、怖い目をしてにらみつけるやら、気味の悪い舌を出して顔をなめるやらするので、

おばあさんは生きた心地がありませんでした。

「たいへんだ、たいへんだ。助けてくれ」とおばあさんは金切り声を上げて、一生懸命逃げ出しました。

そしてやっとのことで、半分死んだようにまっ青になってうちの中に駆け込みました。

おじいさんはびっくりして、「どうした、どうした」と言いました。

おばあさんはこれこれの目にあつたと話して、「ああもう、こりごりだ」と言いました。

おじいさんは気の毒そうに、「やれやれ、それはひどい目にあつたな。」

「だからあんまり無慈悲なことをしたり、あんまり欲ばったりするものではない」と言いました。

「舌切りすずめ」は、いかがでしたか？

あなたの国の童話や昔ばなしをコメント欄から是非みんなに教えてください。

今後の動画制作に活かしますので、コメント欄から感想いただくと大変嬉しいです。

それでは、また別の動画でお会いしましょう。



**Japanese-listening-SUSHI**

